

書評

世界の化石遺産—化石生態系の進化

P. A. セルデン, J. R. ナッツ (著),
鎮西清高 (翻訳)

朝倉書店, 2009年11月15日発行, 160pp.
ISBN-978-4-254-16261-5, 4,900円 (税別)

この本に登場する先カンブリア時代から第四紀までの保存状態の例外的により化石産地 (化石ラガシュテッテン) は、地球上に稀にしか存在しない貴重な化石遺産である。そこから見つかる化石群は、当時の生物の姿を驚くほど鮮明に生き生きと蘇らせ、時に、我々の想像をはるかに超えた謎に満ちた生命の一端を垣間見させてくれる。バージェス、エディアカラといった化石群は、地球生命史上に実在した奇妙な生物の証拠として今やあまりにも有名であり、高校生物の教科書にも載っている。他の化石ラガシュテッテン、スーム頁岩、フンスリュックスレート、ライニーチャート、メゾンクリーク、ボルツィア砂岩、ホルツマーデン頁岩、モリソン層、ゾルンホーフエン石灰岩、サンタナ層とクラト層、グルーベ・メッセル、バルトのコハク、ランチョ・ラ・ブレアに含まれる化石群も、新奇性は少ないにしろ、皆それぞれの時代を生きた生物の実像を伝えてくれる貴重なものばかりである。これら14の著名な化石ラガシュテッテンが一堂に会した姿は、古生物学者のみならず化石や地球生命史に興味のある者をそれだけでワクワクさせる。

本書では、最初に化石ラガシュテッテンの一般的な紹介がある。その後、化石産地ごとに、進化史上の位置と意義の紹介、地質学的背景と層序学的位置、地層の堆積環境とタフォノミー、産出する生物の特徴の記述があり、それらから古生態が復元され、同時代の他の化石ラガシュテッテンとの比較が論じられる。また、しばしば化石産地の社会的状況や発見の顛末にも話が及ぶ。これら盛りだくさんの内容が、数多くの写真や復元図とともに、簡潔に要約されている。それゆえ、著名な化石ラガシュテッテンの概要を短時間に掴みたい者にとっては大変ありがたい。参考文献が化石産地ごとにまとめられ、巻末には索引が付いているので、勉強目的の者にとっても使い勝手が良い。さらに、本物が見たい者のために、博物館と産地訪問の案内まで付いているのだから親切である。この本に記された内容を様々な文献から個別に探り得ようとしたら、どれ程の時間がかかるかわからない。一般の教科書や論文とは一味違う百科事典的な、楽しみながら学べる本である。

ところで、原書の題名は訳書では副題になっている「化石生態系の進化」である。著者は「はじめに」の中で次のように述べている。『いろいろな時代の例外的によく保存された化石産地は地球の生命史に開いた窓のようなもので、これらを研究すれば、過去の生態系の進化についてほとんど完全なイメージを得ることができる。』この本はそこを意図して書かれたに違いない。しかし、本文中には、個々の化石群の古生態の特徴は書かれていても、それらを貫く生態系の進化についての議論は乏しく、著者の意図は伝わらない。どんなに保存状態が良いにしろ、本書に取り上げられた14の化石群だけでは、含まれる生物の種類も生息環境も限られている。それらを並べても生態系の進化の完全なイメージを得るのは不可能ではなからうか。そこまで欲張らなくとも、これら類まれな

化石群の実像とその意義が、様々なエピソードを伴いわかるだけでも本書の価値は十分にある。訳書で付けられた「世界の化石遺産」という題名の方が本書の内容に合っている。

著者の意図はそれとして、この本を読んでいて改めて思ったことは、地質時代の生態系の復元を試みる古生態学の意義についてである。現生生物の全ゲノムが解読され、生命のしくみがいくらか明らかになろうとも、かつて実在した生物の本当の姿と生き様は分からない。それを我々の目の前に再現する古生態学の重要性は計り知れない。それにしても古生態学というのは幅が広く、奥が深い。本書にもはっきりと示されている通り、化石本体の生物学的な研究はもとより、地層の堆積学的研究、化石の産状の研究、タフォノミーの研究がなくてはじめて成り立つ。そう感じつつ思ったことは、この本を本当に楽しむためには、これらの分野の基礎知識が不可欠であろうということである。とは言え、数多くの美しい写真と生物の復元図を眺めているだけでも価値あるひとときを過ごすことはできる。著者は「はじめに」の中で、『読者対象の第一は大学院生・学部学生、化石好きのアマチュアである』と述べている。やはり、読者にある程度の基礎知識があることを前提にしているのだろう。それは、本文中の各分野の記述の中で、専門用語が説明なしに頻繁に使われているところからもわかる。訳書では、訳者が適宜訳注を入れているが、これは読者の大きな助けになるに違いない。

周知の通り、訳者は日本の古生態学を牽引し、発展させてきた古生物学者である。露頭での地層の観察と化石の産状観察を基盤にそこから古生態をひも解く研究スタイルは卓越しており、学界に大きな影響を与え、多くの研究者を育ててきた。地球生命史の研究は地球科学と生物科学の境界領域にある。化石の研究はそれが生物遺体である場合、生物学者にもかなりの有利性がある。しかし、露頭から古生態学的情報を抽出する技は、生物学者には決してまねのできない地学系学者の伝家の宝刀である。しかし、最近、地学に軸足を置き古生物学にかかわる者の多くがその本領を忘れてるように見える。訳者がこの本を通して訴えたかったことはその辺にもありそうである。

金沢謙一

太古の光景 —先史世界の初期絵画表現—

マーティン J. S. ラドウィック (著),
菅谷 暁 (翻訳)

新評論, 2009年7月10日発行, 284pp.

ISBN978-4-7948-0805-9, 4,500円 (税別)

古生物学徒であるわたしたちは「化石からその生物が生きていたときの姿やその生物を取り巻く環境を復元する」という概念に対して、何ら懐疑の念を抱くことはないだろう。そして、このような化石の復元には、現生種との比較や、現在の環境との比較が必要不可欠であることも、あまりにも当たり前のことのように捉えられるだろう。

とはいえ、19世紀以前の人びとにとって、このことは少なくとも「当たり前の概念」ではなかった。もっとも違和感なく受け入れられていたのは、天地創造に関する聖書の叙述であり、キリスト教を背景とした自然認識であった。しかし、人びとの間に地球の歴史は人類の歴史よりもはるかに長い

ものではないかという疑問が芽生え、やがて岩石や化石の研究が進むにつれ、その疑問は確信に変わっていく。そして、人間が存在していなかった時代の世界、すなわち『太古の光景』を絵画で表現する、という方法が生み出され、確立されていく。

本書はこの19世紀における復元画の誕生から成立までを、100点以上の図版を用いて読み解いた科学史そして美術史の好著である。著者は「化石の意味」などの著書で知られる、古生物学者にして科学史家のマーティン・J・S・ラドウィック。訳者の菅谷暁は「地質学の歴史」(ガブリエル・ゴオー著)、「マンモスの運命—化石ゾウが語る古生物学の歴史—」(クロード・ヌ・コーエン著)、「ビュフォン自然の諸時期」(ジョルジュ＝ルイ・ルクレール・ビュフォン著)などの訳を手がけた、科学史家にして翻訳家である。

手に取ってまず驚くのは、その体裁かもしれない。縦横20センチメートルを超える、ほぼ正方形をした本書には、数ページに1枚の割合で復元画が登場する。復元画の掲載されないページでは、紙面の約3分の1を復元画の製作者による解説の文章が占め、著者ラドウィックによる考察と時代背景の説明が残りの紙面を埋める。また、巻末には著者による注、図とテキストの出典、文献目録がまとめられている。したがって、評者のように当時の文化的背景に疎い読者は、複数のページを行きつ戻りつしながら読み進めなければならない。この少々ややこしい紙面構成と、いささか書架での扱いに悩む装本は、『図版の大きさを重視する著者ラドウィック氏の考え方を最大限尊重したい、という訳者菅谷氏の強い希望によるもの』(新評論・編集者の弁)であり、本書が科学史の本であるとともに美術史の本である、というこだわりのあらわれかもしれない。

第1章の「天地創造と大洪水」では、想像上の世界である天地創造の場面を表現した聖書の挿絵や、ノアの大洪水を描いた宗教画を振り返っている。これらの宗教画の成熟は「見たことのない世界をあたかも見たように描く」ことの下地が完成されつつあったことを示している。続く第2章「過去への鍵穴」は、絶滅したハイエナの巣に入り込むウィリアム・バックランドを描いたウィリアム・コニベアの戯画(1821年)を扉絵として始まる。洞穴の入口から顔を覗かせたバックランドはまさに過去を垣間見る時間旅行者を暗示させる。この章で紹介される、ヘンリー・デ・ラ・ビーチの描いた「太古のドーセット」(1830年)に描かれるのは、イクチオサウルスに捕食されるプレシオサウルスの断末魔の姿や、威嚇しあうように空を舞うプテロダクティルスの生き活きとした姿である。この絵は科学の視点を取り入れて描かれた最初の真の『太古の光景』の復元画である、と著者は評する。その一方で、奔放な想像力が化石研究を科学から逸脱させてしまうという危惧からか、こうした復元図の持つ魔力に魅惑されながらも、自身の出版物の挿絵としては伝統的様式に頑なに固執したジョルジュ・キュビエの葛藤についても触れられている。第3章の「太古の世界の怪物たち」では、戯画に始まった『太古の光景』の復元画が、わずか10年そこそこの間に一般に広く知られるようになり、多数の出版物が世に送り出された時期について述べられる。この時期の復元画は、読者の興味を引くため過度に脚色されていたり、特別な根拠がないままに彩色されていたり、時には劇画的であったりもした。地質学の進歩によって地球の歴史や生命の歴史が連続していることがだんだんと明らかにされると、『太古の光景』も連続的に捉えられるようになる。第4章「最初の連続的光景」で述べられる、フランツ・ウンガーが執筆しヨーゼフ・クヴァセクが挿絵を描いた「さまざまな形成期における原始の世界」(1851年)がそれである。ここでは、最古の地質時代から現在までを14枚の連続する復元画で表現したこの書について、その先

駆的な内容と意義が紹介される。一方、第5章「怪物たちを飼ひ慣らす」では、復元画が気軽な読み物や博覧会での模型展示などを通じて一般大衆に浸透していった様子が紹介される。この結果、第6章「確立したジャンル」にまとめられるように、『太古の光景』の復元画は、現在の博物館のジオラマ展示やテレビの科学番組にも通ずる、完成された手法としての地位を得るに至る。その極致として取り上げられるのは、ルイ・フィギエが執筆しエドゥアール・リュウが挿絵を描いた「大洪水以前の地球」である。初版(1863年)、第4版(1865年)、第6版(1867年)に掲載された挿絵を比較し、当時の科学の発展をいち早く反映することによって『太古の光景』がよりいっそうドラマチックに描き改められていく様子が詳しく述べられる。最後の第7章「すべてのことを解き明かす」は、むしろ第1章から第6章までのまとめとエピローグといってもいい。聖書の表現を下地に戯画から始まった復元画が、科学の発展とともに洗練され、やがて大衆に浸透し、現代のエンターテインメントにつながる時代の幕開けまでを俯瞰している。

つまり、本書を一言で表現してしまうと、『太古の光景』が聖なるものから誰もが楽しめるものへと変わっていく時代を振り返ったもの、といえるだろう。掲載されている図版を順に眺めるだけでも、当時の人びとが体験した衝撃と知的興奮を迫体験できよう。時になかなか読み進むことが困難な表現もないわけではないが、それは19世紀のヨーロッパにおける文化的背景に対する評者の知識の乏しさによるものであろう。古生物研究の成果を表現することの歴史、という本書の主題は、現代の博物館における展示の歴史や学問の社会還元の歴史に通ずるものがある。学会員をはじめとする博物館関係者は勿論のこと、古生物学のアウトリーチを考えるすべての学会員諸姉諸兄にお薦めしたい。

佐藤武宏

0.1 ミリのタイムマシン

須藤 斎(著)

くもん出版、2008年11月11日発行、134pp.
ISBN978-4-88713-932-9、1,400円(税別)

大型化石に比べると、微化石の本はなかなか出版されない。それは、やはり馴染みの少ない化石であり、肉眼で簡単に見えないからであろう。微化石は古海洋、古環境、進化の研究には欠かせない化石であり、石油などの資源探査にも利用され、古生物の中でもきわめて有用性の高い化石である。星砂、貨幣石、ウミホタルなどは、有孔虫や貝形虫の別名でよく知られているが、やはり恐竜などに比べると知名度は低いであろう。しかし本書は、なんと「珪藻」を題材とした本である。珪藻は“海の牧草”とよばれ、海洋の一次生産を支える重要な生物群で、現世でも地質時代でも最も重要な植物プランクトンの一つである。著者は、この微化石の内容を児童書として出版し、さらに2009年5月に「産経児童出版文化賞」の「大賞」を受賞してしまったのである。

本書は「はじめに」と「おわりに」を加えた7章からなる。「はじめに」では「これはなんの写真でしょう」というクイズから入る。それから大型化石、微化石について説明していくが、図や写真が多く、あきさせない内容となっている。化石に関して一般的な説明をした後、「第一章 ケイソウとは、いっ

たいなもの？」でケイソウの生物や生態に関する解説をする。ここでも、きれいな図をうまく使って平易に説明しているので、生物に詳しくない人でもよくわかる。次は、著者の専門である休眠孢子の解説であるが、専門用語を一切使用せず、「第二章 お休みケイソウに名前をつける」として解説する手法を取っている。この章と次の「第三章 ついに完成した分類」は、分類学の話であるが、そのことを全く感じさせない内容となっている。本書を読んでいると、生物を識別して整理するという分類学の大切さを、このように説明する手法もあるのかと感心させられる。「第四章 「地球の時間のものさし」を使う」では、微化石の役割である年代決定の重要性、その方法、さらに微化石から明らかにされた古海洋の成果を述べている。

本書の構成のもう一つの特徴は、後半の3章にある。「第五章 北極海からのレポート」「第六章 北極についての新知見」「第七章 研究者たちとの一ヶ月」は、著者が参加したIODPの第302次航海の紹介である。この航海は、統合深海掘削計画(Integrated Ocean Drilling Program)の一つとして行われ、北極掘削計画(Arctic Coring Expedition, ACEX)とよばれている。この計画は1970年代から継続している深海掘削計画が、初めて北極海の掘削を実現したものである。深海掘削計画の最も重要なところは、国際共同の研究プログラムとして継続している点にある。この計画では、20人をこえる世界中の研究者たちが同じ船に閉じ込められ、1ヶ月から2ヶ月の共同生活を行う。我々研究者であっても、諸外国の研究者とこれだけの長期間、寝食を共に共同研究をする機会は人生においてあまりないであろう。この3章は、その生活の様子を生き生きと描いており、若い人たちにぜひ読んでいただきたい部分である。第5章では乗船前の準備から船が出航し、掘削を開始するまでの過程が書かれている。なかなかケイソウが産出せず、著者のあきらめやあせりが伝わってくるが、第6章では一転してケイソウが見つかり始め、喜ぶようすが目に浮かぶようである。このような研究者の一喜一憂の心情が描かれており、航海に参加しているような気分になってくる。第7章では、研究者に限らず国際社会に出て行く場合の大事なことが数多く書かれている。若い人たちはそれほどでないと思うが、我々のような古い世代は英語がうまくしゃべれないために、会議や集会では発言を控えがちになる。しかし、1ヶ月も閉じ込められると会話は必要不可欠で、とにかくしゃべる“気合い”が大事である。最後の章では、著者が「苦手な？」英語を克服した手法も書かれている。

本書は児童書として分類される。しかし、本書は我々が読んでもおもしろい本である。簡単にわかるケイソウの解説書、深海掘削計画の体験記、あなたもできる国際研究、英会話マスター法、などいろいろな読み方ができると思う。やはり、読んでいただきたいのは小学校、中学校、高校生などの若い人々である。「産経児童出版文化賞」の「大賞」を受賞した理由も、単なる科学解説書としてとらえていたのではなく、若い研究者が国際研究で体験した出来事を若い人々に伝え、理科のおもしろさ、国際研究のおもしろさを伝えている点を評価したことにあるのではないだろうか。ぜひ皆様の周囲の若い方々にご推薦していただきたい。そして、地球科学や古生物学などの科学者を目指したいという若い方々が増えてくれることを願っている。

西 弘嗣

学術集会参加報告

「ICOS 2009 (International Conodont Symposium 2009)」参加報告

はじめに

国際コノドントシンポジウム(International Conodont Symposium: ICOS 2009)が、2009年7月12日～17日にわたりカナダ・アルバータ州のカルガリー大学(University of Calgary)で開催された。ペルム紀コノドント研究の第一人者であるCharles Hendersonが主催し、前回2006年7月にイギリスのレスター(Leicester)大学で開催されて以降、国際会議となつてからは2回目のシンポジウムである。カルガリー大学は1966年に設立された比較的新しい大学で、カルガリーの中心街から北東5kmほどのところにある田園地帯の一面に位置し、16の学部と60以上の学科からなる総合大学である。今回のシンポジウムの講演は理学部地球科学教室内の200名を収容できる階段教室(ICT: Information and Communications Technology 121)で、またポスター発表はICT 116教室で行われた(図1)。カナディアン・ロッキーの東山麓にあり標高1000mをこえるカルガリーは、夏の天気の良い日中は気温30度をこえるが、曇りや雨では一気に10度を下回る“寒さ”となる。

シンポジウムは7月13日(月)、14日(火)、16日(木)、17日(金)に開かれ、15日(水)にはRoyal Tyrrell Museum of Palaeontologyへの一日巡検が組まれていた。また、16日の午後の後半にビジネス・ミーティング、その後にバンクエットが開催された。シンポジウムの初日と終了日の翌日(18日)には日帰りのBurgess Shale Tripが、シンポジウム終了後の18日から22日(水)までは4泊5日のRocky Mountain Field Tripが用意されていた。

シンポジウムの報告

公式な発表は未だないが、筆者が受け付けに確認したところこのシンポジウムの出席者は18ヶ国80名ほどのことであつた。地元カナダとアメリカ合衆国からの出席者が圧倒的に多かったが、カルガリー大学に在籍する教職員・学生を含



図1. シンポジウムが行われたカルガリー大学理学部地球科学教室の建物。

め中国からの参加者も10名を越えていた。日本からは筆者ら2名のみが参加した。

シンポジウムは、地質時代ごとにコノドントの層序・古生物地理・コノドントを含む地層の地球化学に関する話題と、機能形態に関するテーマを中心に編成されていた。7月13日の午前中はJeffrey Overの司会によりデボン紀、午後はCarl Rexroadによる石炭紀、14日午前はMark Schmitzの司会でコノドント及びそれを含む地層の地球化学に関するトピックスが、午後はShilong Meiによりペルム紀、16日午前はMark Purnellの司会により機能形態と古生態について、午後はCharles Hendersonにより古生態とLagerstätte、17日最終日の午前中はStephen Leslieによりカンブリア紀～シルル紀、午後はMike Orchard司会により三疊紀についてのセッションが設けられた。基調講演と口頭発表で52件、ポスターで18件の発表があった。筆者らは13日のデボン紀コノドントのセッションで「Agematsu and Sashida: Silurian to Early Devonian conodonts from Malaysia and Thailand」と題し口頭発表を行なった。各セッションとも、最新の研究資料に基づく内容豊かな、動画等を用いた生のデータが提示され、活発な質疑応答が行なわれた。

今回特に印象を受けたのは、各地質時代のGSSP (Global boundary Stratotype Section and Point) の再検討について、同位体年代と古地磁気層序・コノドント生層序を含めた統合層序により世界各地で数cm～数mm単位の精度で議論を行っていることである。また同位体地球化学的手法を用い、コノドントの古環境解析、埋没深度と色変化指標 (CAI: conodont colour alternation index) 等の総合的な解析が進んでいる。ペルム紀/三疊紀 (P/T) 境界層では岩相層序・コノドント生層序がさらに詳細に設定されつつある。コノドントの機能形態と古生態に関しては、Mark Purnellたちのグループがコノドントの草食性、肉食性等の食性に関して、力学的な解析を行っていた。GoudemandやOrchardらのグループは三疊紀コノドントのエレメントについてコンピューター・シュミレーションを用いた三次元的な動きの再現を試みた。Christopher Barnesらはオルドビス紀のGOBE (Great Ordovician Biodiversification Event) について、コノドントの酸素同位体解析から詳細な時代ごとの気温・海水温の変動を示し、生物の多様性の変化を議論していた。

ポスター発表の多くは口頭発表と重複していたが、von Bitterにより、北米イリノイ州のPennsylvanianのCarbondale層から*Gondolella pohli*の自然集合体の中にコノドントの卵と思われる化石が報告された。これは現世のメクラウナギに見られる卵と類似した形態を持っており、コノドントの新たな生態学的知識が加わった。

16日午後の後半はビジネス・ミーティングで、次回4年後のICOS 2013開催国について審議され、アルゼンチンに決定した。

Hinde Medalの制定と受賞について

Pander Societyでは今回のシンポジウムからHinde Medalを制定し、将来性のある若いコノドント研究者に授与することになった (図2)。Hinde (George J. Hinde: 1839–1918) はChristian H. Pander (1874–1865) とともにコノドント研究の基礎を築いた人物として知られている。今回筆者の一人、上松佐知子がこのHinde Medalを受賞した。前回イギリス・レスター大学で同様の趣旨で賞を受賞したレスター大学のMark Purnellにつづき、今回で第2回目の受賞者ということになった。受賞理由として、1) ほとんど報告されていない東南アジアの前・中期古生代コノドントの分類学的検討を行い、詳細な生層序を設定したこと、2) 熊本県・五木村から前期三疊紀*Neostrachanognathus tahoensis*の自然集合体の発見

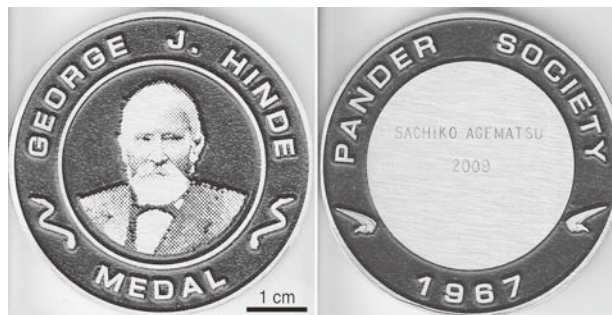


図2. Hinde Medal. 表と裏。

(カナダ地質調査所のMike Orchardとの共著)と*Neostrachanognathus*のアパレイタスを詳細に復元したことが評価された。

巡検について

筆者らは今回のシンポジウム前後の巡検には参加せず、7月15日のRoyal Tyrrell Museum of Palaeontologyへの一日巡検に参加した (図3)。博物館はカルガリー大学から東方へバスで約1時間半のところに位置し、途中Horseshoe Canyonと呼ばれる公園に立ち寄った。ここは、白亜紀の陸成層が侵食により馬蹄形に現れており、黒白の水平層が織り成す縞模様が印象的な景観であった。博物館ではDirector of Preservation and ResearchのDon Brinkmanの案内でバック・ヤードの見学を行った。夥しい数の大小の恐竜やカメを含めたその他の爬虫類の化石が手際よく配置され、バック・ヤードの見学の展示もうまく構成されていた。その後は博物館の常設展示を見学した。博物館自体の大きさは予想していたより小さいが、展示標本の数・質とも、やはり格別な博物館であることが実感できた。

おわりに

アメリカとカナダのコノドント研究者との個人的な話では、コノドントを含め古生物を研究する学生は年々少なくなり、いずれは地質学・古生物学教室の閉鎖もあり得るなど将来を危惧する声が多かった。卒業研究で古生物学教室を希望する学生の大半がRoyal Tyrrell Museum of Palaeontologyにあるような大型爬虫類化石の研究を希望するため、いかにコノド

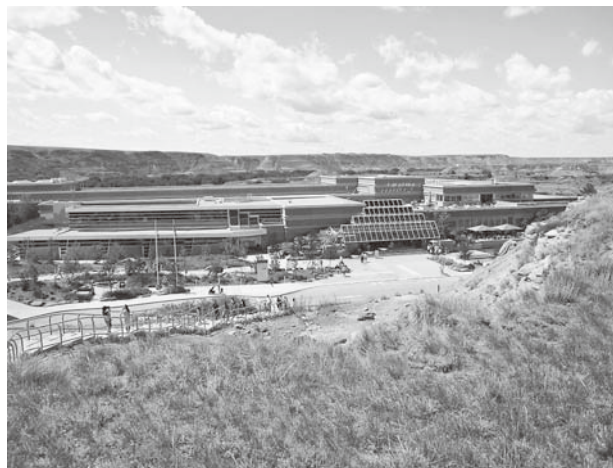


図3. Badlandの遊歩道から見たRoyal Tyrrell Museum of Palaeontologyの建物。

ントや放散虫などの微古生物を研究させるか指導教授の腕の見せ所となっているそうである。最後にシンポジウムの運営を行ったカルガリー大学のCharles Henderson博士とその学生諸君、また筆者らのシンポジウム参加に対して暖かい配慮をいただいたvon Bitter博士をはじめ、Pander Society執行部の方々に厚く御礼申し上げる。

上松佐知子・指田勝男

(筑波大学生命環境科学研究科地球進化科学専攻)

「第16回国際貝形虫シンポジウム」 参加報告

2009年7月26～30日にかけて、ブラジルの首都ブラジリアにおいて第16回国際貝形虫シンポジウム (International Symposium on Ostracoda: ISO) が「Biostratigraphy and applied ecology」というテーマで開催された。ISOは4年に一度開催され、前回の開催地はベルリン (ドイツ) であった。ちなみに日本では、1985年と2001年に静岡大学で開催されている。今回は、ブラジル、日本、イギリス、ドイツ、ロシア、トルコ、メキシコ、イスラエル、アルゼンチン、イタリア、アメリカ合衆国、フランス、スペイン、ベルギー、ベラルーシ、ポルトガル、オーストリア、オーストラリアなどから約90人の参加者があり、4年ぶりに旧交を温め、また活発な議論が交わされた。大会委員長はDermeval A. Do Carmo (ブラジル)、名誉委員長はIrajá D. Pinto (ブラジル)、ISOの運営母体であるInternational Research Group on Ostracoda (IRGO) の役員はそれぞれ、議長 Koen Martens (ベルギー)、副議長 Dermeval A. Do Carmo (ブラジル)、前議長 Alan R. Lord (イギリス)、書記 Michael Schudack (ドイツ)、会計 塚越 哲 (日本) であった。

会場はブラジリア市内のリゾートホテルで、7月26日にオープニングセッション (図1) と立食パーティーが行われた (図2)。筆者は今回で3回目の参加となるが、非常にアットホームな雰囲気の中で、料理とお酒を楽しみつつ各国の研究者と交流を深めることが出来た。翌27日から口頭発表が開始され、プログラムは基本的に地質時代の新しい方から古い方へと配置されていた。つまり、初日は完新世および現生の発表で、最終日に中生代の講演が集中していた。また、午前と午後それぞれ30分のコーヒーブレイクが設けられており、議論を深めるのに好都合であった。ポスターは学会会期を通



図2. 立食パーティーの様子。Dermeval A. Carmo氏提供。

じてポスター会場に張り出されていたが、29日の2時間のポスターセッションタイムを除き、殆ど訪れる人がおらず、少々口頭発表偏重であると感じられた (図3)。

淡水から海水、古生代から現生まで様々なテーマの発表が行われたが、分子系統学的手法を用いた系統解析や現生淡水貝形虫の隠蔽種の発見、淡水貝形虫殻を用いた同位体比・微量元素研究、中央アジア域における古陸水学的学際研究プロジェクト、例外的に保存のよい化石の立体復元、深海底貝形虫、といったテーマの発表が特徴的であり、これはほぼそのまま現在の国際的な貝形虫研究の流行を反映していると言える。また、各日の冒頭で以下のようなキーノート講演が行われた。

27日, Koen Martens: Zoogeography of non-marine Ostracoda.

28日, Renate Matzke-Karas: Synchrotron holotomography in ostracod research - an assessment of prospects and limits.

29日, Jean-Paul Colin: Marine ostracodes at the K/T boundary: state of knowledge.

30日, Maria José Salas: Diversity patterns of Ordovician ostracods from Argentina.

特にRenate Matzke-Karas (ドイツ) の講演は、ISO直前にブラジル産の標本に基づいてScience誌に公表された、軟体部の保存された貝形虫化石の3次元復元に関する内容で、非常にタイムリーかつ興味深い内容であった。また、淡水貝



図1. オープニングセッションの様子。Dermeval A. Carmo氏提供。



図3. ポスターセッションの様子。中央は塚越 哲氏。Dermeval A. Carmo氏提供。

形虫研究の指導的立場にある Koen Martens による総括、これまであまり総括されてこなかった貝形虫の K-Pg 絶滅についてのレビューなど、いずれもキーノートにふさわしい充実した講演であった。

日本人参加者は、塚越 哲 (静岡大)、伊藤エミ (ミネソタ大)、山田晋之介 (東京大)、中尾有利子 (日本大)、岡橋久世 (スミソニアン自然史博)、蛭田眞平 (北海道大)、東 亮一 (静岡大)、田中隼人 (静岡大)、そして著者の 9 人であった。今回は地球の裏側ということもあり、前回のベルリンよりかなり日本人参加者が少なかったが、それでも、開催国ブラジルに次ぐ (もしくは匹敵する) 人数で、貝形虫研究の日本での活発さが反映されていた。特に、機能形態学・分子系統学分野における非常に緻密な研究は国際的に高く評価されていることが感じられた。日本人の演題は以下の通りである。

口頭発表:

Hayato Tanaka, Akira Tsukagoshi: Reproductive isolation in species of the interstitial genus *Parapolycope* (Myodocopa: Cladocopina)

Shinnosuke Yamada, Dietmar Keyser: Calcification of the marginal infold in podocypid ostracods

Ryouichi Higashi: Molecular phylogeny of marine interstitial cytheroid Ostracoda

Shimpei F. Hiruta, Shin-ichi Hiruta, Shunsuke F. Mawatari: Molecular phylogeny of non-marine Ostracoda

Moriaki Yasuhara, Thomas M. Cronin, Gene Hunt, Hisayo Okahashi: Climatic influences on deep-sea ostracode species diversity

Rebecca Clotts, Emi Ito, Richard M. Forester: Relation between continental ostracode population structure and physicochemical variability

Thijs Van der Meeren, James E. Almendinger, Emi Ito, Koen Martens: Ecophenotypic morphological variability in *Limnocythere inopinata*: a case study from Mongolia

ポスター発表:

Yasuhiko Sakumoto, Akira Tsukagoshi, David J. Horne: The role of the antenna in valve opening in platycypid Ostracoda
Yuriko Nakao, Akira Tsukagoshi: Brackish-water ostracodes as environmental indicators from the Obitsu River Estuary, central Japan

また、最優秀学生発表賞 (Sylvester-Bradley Awards) は Laurent Decrouy (口頭発表)、Anna Baczewska (ポスター発表)、および Josep A. Aguilar-Alberola (ポスター発表) に与えられた。受賞の対象となった演題は以下の通りである。

Laurent Decrouy, Torsten Vennemann, Daniel Ariztegui: Controlling factors of ostracod valve geochemistry: insights from analyses of live species in Lake Geneva (Switzerland)

Anna Baczewska, Katarzyna Blachowiak-Samolyk, Martin V. Angel: Distribution of pelagic ostracods inhabiting Svalbard waters (76°36–81°50N)

Josep A. Aguilar-Alberola, Francesc Mezquita, Sergi López, Alexandre Mestre Pérez, Joan C. Casanova, Juan Rueda, Alexis Ribas: An invaded invader: infection of the red swamp crayfish *Procambarus clarkii* (Girard, 1852) by entocytherid ostracods in the Iberian Peninsula

学会会期中には、市内観光やシュハスカリアでのディナー等のイベントもあり、ブラジリアの観光名所やブラジル料理を堪能できた。大会運営には不手際も多く、巡検中止等のアクシデントもあったようだが、これまで2回の静岡での開催を除くと欧米でしか行われてこなかった ISO が初めて南米大陸で開催された意義は大きい。また、Hydrobiologia 誌上で特集号が予定されている。

ISO ビジネスミーティングにおいて、今回の ISO はイタリアのローマで2013年に開催されることが、アメリカ合衆国との投票の結果、決定した。ISO の運営母体である IRGO の新議長として Renate Matzke-Karasz、副議長に Elsa Gliozzi (イタリア)、前議長に Koen Martens、書記に Ricardo Lourenco Pinto (ブラジル) が選出され、会計は塚越 哲が引き続き担当することが承認された。さらに、IRGO の website 等を担当する新役職として Communication officer が設立され、Michael Schudack が初代役員として選出された。ニュースレター Cypris の作成は引き続き Elisabeth M. Brouwers (アメリカ合衆国) が行うこととなった。

最終日には機材のトラブルでプログラムが遅れ、帰国便との都合で David J. Siveter (イギリス) による軟体部の3次元構造が保存されたシルル紀貝形虫についての講演を聴くことが出来ず、後ろ髪を引かれる思いで会場をあとにしたが、非常に充実した5日間であった。大会運営関係者の方々に深く感謝したい。(本文中全て敬称略)

安原盛明 (スミソニアン研究所・自然史博物館)

学会記事

日本古生物学会 (2009・2010年度) 第2回定例評議員会議事録

日時: 2010年1月28日(木) 13:30–17:30

場所: 滋賀県立琵琶湖博物館会議室

出席: 加瀬会長、安達、天野、生形、大路、小笠原、北里、甲能、近藤、佐藤、富田、西、長谷川、平野、平山、間嶋、真鍋、矢島

欠席: 安藤 (委任状→大路)、植村 (委任状→甲能)、遠藤 (委任状→間嶋)、前田、棚部 (委任状→矢島)、松岡 (委任状→近藤)、柳沢 (委任状→真鍋)

書記: 中島、和仁庶務幹事

報告事項

常務委員会報告 (間嶋)

庶務 (間嶋)

1. 「女性科学者に明るい未来をの会」より「猿橋賞」の推薦募集案内があった。
2. 7月20日(月)静岡大学で庶務の引継ぎを行った。
3. 古生物学会メーリングリスト psj-councillors (評議員)、psj-standing (常務委員)、psj-future (将来計画委員)、psj-secretaries (幹事) の管理者の引継ぎを済ませた。
4. 千葉年会での参加費引き下げに伴い、プログラム記載の参加費と領収書記載の金額に齟齬が生じた。更に会場で発行した領収書 (名札) に学会印が押されていないという問題が発生したため、希望する会員には、事務局から領収書を発行する連絡を、メールアドレスの登録されている会員に行った。
5. 日本鳥学会より2014年の東京での国際鳥類学会会議開催実現の為の Support letter 作成の依頼があり加瀬会長が作成の上、日本鳥学会会長に手渡した。
6. 地球惑星連合から学会選出プログラム委員選出の問い合わせがあり、本山氏と延原氏に継続して委員をお願いする

こととした。

7. 第2回SPARC Japanセミナー2009「非営利出版のサステイナビリティとは—OUPに学ぶ」(平成21年8月4日(火)13:30-17:00)の開催案内があり、学会から真鍋委員に出席して頂くことになった。
8. 日本学術振興会から「古生物学会は公益法人かどうか」の問い合わせが電話であり、「公益法人ではない」旨回答した。
9. 柳沢委員より、日本学術振興会のH20科研費(成果公開)PR補助金の実地検査の日程が、10月30日(金)14:00-16:00、場所：古生物学会事務局で行われるとの連絡があった。
10. 地質情報整備・活用機構より、「地質地盤情報に関するアンケート」があったので、庶務が回答して返送した。
11. 一般社団法人学術著作権協会より現状調査への回答の依頼があり、学会事務局(関氏)がすでに登録されている情報の確認・修正を行った。
12. 熊本大学の小松俊文氏より、IGCP507国内向けの開催案内を学会メーリングリストで流す旨の問い合わせがあり、学会事務局(関氏)よりHP掲載なら受け付ける旨の連絡を行った。また、同氏より同シンポで使用される野外巡検の案内書に以下の論文の図の転載申請があり、これを許可した(0908010)。Komatsu and Maeda (2005) Stratigraphy and fossil bivalve assemblages of the mid-Cretaceous Goshoura Group, southwest Japan (Figs. 6, 7, 9, 10を使用予定)。
13. 日本コンgres・コンベンション・ビューロー(JCCB)事務局長 登 誠一郎氏【日本政府観光局(JNTO)理事】より国内会議開催意向調査へのアンケート協力をお願いがあり、近藤康生行事委員へ回等を依頼し、近藤行事係から回答を行った旨の連絡があった。
14. 国際惑星地球年日本事務局より「国際惑星地球年日本平成21年度協賛金をお願い」(一口5万円)があり、次回常務委員会で審議することとした。
15. 委嘱状の依頼のあった生形常務委員、北里評議員に委嘱状を送付した。
16. 地学オリンピック日本委員会事務局から報告があった。
17. 「日本学術会議協力学術研究団体フォローアップ調査の実施について」という調査があり、学会情報を関氏と和仁庶務幹事が回答することにした。
18. 下記の幹事を選出した(敬称略)。庶務幹事：和仁良二(横浜国大)、中島 礼(産総研)、行事幹事：岩井雅夫、村山雅史、奈良正和(高知大学)、企画・広報幹事：河潟俊吾(横浜国大)、欧文誌幹事：佐々木猛智(東大)、入月俊明(島根大)、和文誌幹事：鈴木雄太郎(静大)、会員幹事：田中源吾(群馬県博)
19. 常務委員会や評議員会などへの学会連絡を行うYahooのメーリングリストによるメールが横浜国大ではスパムメールとされて配信されないことから、今期は新たに作成した横浜国大のメーリングリストを使用することが承認された。
20. 国際惑星地球年日本事務局の協賛金(一口5万円)支払いを常務委員会で議論することになっていたが、既に約束済みの件であることが確認できたので支払うこととした。
21. 自然史連合代表候補の次期代表候補者として打診した方が承諾されなかったため、別の方に打診することを承認した。
22. 第4回メール常務委員会にて、第159回例会においてハワイ大学Steven M. Stanley教授の講演を例会行事に組み込むことを了承した。
23. 前年度の該当評議員、幹事、委員担当者に以下の通り簡易委嘱状、感謝状、特別感謝状を郵送した(敬称略)。簡易委嘱状：河潟俊吾、岩井雅夫、佐々木猛智、松本みどり、

村山雅史、大花民子、中島礼、田中源吾、奈良正和、入月俊明、鈴木雄太郎。感謝状：伊左治鎮司、佐々木猛智、北村晃寿、本山 功、柳沢幸夫、鈴木雄太郎。特別感謝状：尾田太良。

24. 古生物学会の会長変更届を、文部科学省、日本学術会議、日本地球惑星科学連合に送付した。
25. 古生物学会のHPにサイエンスアゴラの案内(ポスター2つ)の掲載依頼が北里評議員からあり、HP係に掲載を依頼した。
26. 第2回メール常務委員会議事録案(会員の入退会)を送付した。
27. PRの図の転載承諾の申し込みがあり(高橋会員)、これを許可した。
28. 「地球惑星科学連合」代議員選挙の案内を会員に送付した。
29. PRの科研出版助成に向けて仕様策定委員会の立ち上げを行った。
30. 来年のIPC(イギリス)参加の定職のない若手研究者へ旅費を援助する提案があり、常務委員会で審議することとなった。
31. Paleontological Research Institutionとの雑誌交換について特別号係と会長の判断で受入れることとした。当学会からはPR、特別号、PR supplementを送り、相手側からはBulletins of American Paleontology, Palaeontographica Americanaを送ってもらうが、バックナンバーの交換については未定である。
32. PRの科研出版助成に向けて、テラパブ、学術図書、レタープレス3社に見積の依頼を送付した。この際、印刷金額が250万円を切る場合は競争入札を行わず、見積もり金額その他を勘案して印刷会社を決定する旨の内容を書き記した。
33. 「75周年記念大会での貢献賞、感謝状贈呈候補者の推薦のお願い」を評議員に送付した。
34. 「地方分権改革推進委員会第3次勧告に示された博物館法改悪について(依頼)」の連絡が一般社団法人日本考古学協会からあり、常務委員会で審議することとなった。
35. 科研費実地検査報告が真鍋常務委員からあった。
日時：2009年10月30日(金)14:00-15:30
場所：日本古生物学会事務局
出席者(敬称略)：日本学術振興会研究事業部研究助成第二部：角村法久、野崎 順；柳沢(前渉外)、真鍋(渉外)、関(事務局)。
36. 第3回メール常務委員会議事録案(会員の入退会)を送付した。
37. PRの科研費出版助成に向けての各社の見積もり金額は、学術図書 1,828,890円(税込み、印刷実績あり)、テラパブ 2,100,000円(税込み、印刷実績あり)、レタープレス 2,492,049円(税込み、印刷実績なし)。意見交換の結果、印刷会社の選定は常務委員会での審議事項とすることとなった。
38. 第4回メール常務委員会の議題として「次回例会で、S.M. Stanley教授の講演を例会行事に組み込むこととし、日程案等は行事係に一任する。」という議事を常務委員会にはかった。
39. 2010年3月17～19日に島根大学において微古生物関係者が集まってMRC島根大会を開催する案内を古生物学会ホームページへ掲載する依頼(北里評議員)を受け、これを掲載した。
40. 日本地球惑星科学連合の定款一部変更案に対し、同連合事務局に同意書を送った。
41. 日本地球惑星科学連合事務局から「刷新会議事業仕分」

に対する意見表明があり、声明文に賛同する旨をメールで連絡した。

42. 自然史学会連合の「博物館法見直しに対する反対声明」に関する声明文へ賛同する旨を連絡した。
43. 第4回メール常務委員会議事録（案）を送付した。
44. 日本学術会議地球惑星科学委員会の平 朝彦委員長より「大型研究計画（100億円規模）を作成し、第四期科学技術基本計画策定等に反映させ、またG8の科学担当部会にて提示できるように学協会にコメントを求められたため、12月11日までに評議員に意見募集を行った。
45. 海洋研究開発機構の野牧氏の依頼により、東京大学海洋研究所で開催される古海洋学シンポジウムの案内を学会員へメールで連絡した。
46. 第5回メール常務委員会（会員の入退会）議事録案を送付した。
47. 「本学会名誉会員・市川浩一郎先生ご逝去に関わる対応について」、「事業仕分けに関する本学会の意見表明について」、および「学会の若手研究者の意見表明について」の会長見解を常務委員に通知した。
48. 故・市川浩一郎名誉会員のご遺族に、お悔やみ状を添えた御供物を、会長と庶務係が海外出張中のため、生形常務委員が代行して発送した。
49. 市川浩一郎名誉会員の訃報を、評議員に通知した。
50. 本学会の「行政刷新会議事業仕分けに対する意見書」を関係会議に送付した。
51. 衆議院議員の宮本岳志氏（共産党）からの学協会懇談会の案内について、次回常務委員会で審議することとなった。
52. 報告事項45の案件について、西常務委員提案の文書を日本学術会議地球惑星科学委員長の平 朝彦氏に送付した。
53. メール常務委員会の回数について生形前庶務から間違いの指摘があり、修正した。これまでの1～4回メール常務委員会と呼んでいたものが、2～5回に修正された。
54. 本学会が提出した「行政刷新会議事業仕分けに対する意見書」を学会ホームページに掲載した。
55. 衆議院議員の宮本岳志氏より案内のあった「科学・高等教育の予算充実のための懇談会」に欠席と返答することとした。ただし、本学会から「事業仕分け」結果に対する意見書を提出したことを申し添えた。

渉外（真鍋）

1. 10月30日に日本学術振興会による科研費実地検査が学会事務局で行われた。3点の追加書類の提出が求められたが、書類の保管状況、支出内容及び記録、在庫管理、会計監査体制について良好という結果を得た。
2. 11月13日に科研費（PR出版助成）を学振に申請した。4年間で540万円の申請内容である。3社から印刷費の見積もりをとったが、いずれも250万円以下だったため競争入札の必要はなくなった。

会計（佐藤）

1. 7月23日（木）に学会事務局で間嶋前委員、和仁前幹事、関事務局担当とで会計の引き継ぎを行った。

行事（近藤）

1. 2009年千葉年会では、参加者315名、懇親会参加者158名、収入は681,000円、支出676,970円であった。ただし、千葉大学からの経費の追加申請があり、これが認められれば、支出は707,200円となる。
2. 第159回例会（琵琶湖博）の講演申し込み締め切りは11月30日（月）。
3. 第160回例会（高知大）における研究成果公開Bの申請に向けて準備中。
4. 2011年年会の開催地について、2010年の開催地として申し込みがあった金沢大と新たに打診があった名古屋大の2

大学で調整中。

5. 2009年年会を開催した千葉大学から30,230円の追加支出の申し出があり、これを承認した。
6. 第160回例会の普及講演会に向けて、科研費研究成果公開Bの申請書を11月13日に提出した。講演は北里 洋氏と須藤 斎氏に依頼。講演会タイトル：「知られざる微小化石の魅力：微小生物の化石から太古の記憶を繙く」。
7. 第160回例会及び2012年年会総会開催地として、それぞれ高知大学及び金沢大学から開催申し込みがあった。
8. 12月15日に第159回例会を琵琶湖博物館で開催するため、行事委員名で共催依頼書の文書を提出した。
9. 第159回例会の講演申込数は、口頭発表67件、ポスター発表44件、合計111件。シンポジウム講演は6件。
10. 第159回例会での開催経費について、例会実行委員から329,000円の開催費補助依頼があり、大枠を承認した。補助内容の詳細については検討の余地がある。
11. 第159回例会を開催する琵琶湖博物館から、博物館で開催されるギャラリー展示「古生物の復元」共催の依頼があり、承諾することとした。
12. ハワイ大学のS. M. Stanley教授に、第159回例会における招待講演を正式に依頼することとした。また、Stanleyご夫妻を懇親会に招待することにした。
13. 第160回例会を2011年1月28日～30日前後に高知大学で開催する原案を承認した。詳細な日程案とともに次回評議員会に諮る。

企画・広報（甲能）

1. 河鴻広報幹事不在のため（約2ヶ月間の海外出張）、10月から来年1月上旬まで学会ウェブサイトの管理を中島庶務幹事が代行している。

国際交流（遠藤）

1. Paleontological Research Institutionとの雑誌交換について、会長と相談の上受入れることとした。当学会からはPR、特別号、PR supplementを送り、相手側からはBulletins of American Paleontology, Palaeontographica Americanaを送ってもらう予定だが、バックナンバーの交換については未定である。
2. Saito *et al.* 復刻版CD-ROMは残部が80枚となっており、制作担当者の西君と事務局で在庫を保管している。

電子ジャーナル（真鍋）

1. 8月4日に第2回SPARC JAPANセミナー2009「非営利出版のサステイナビリティとは—OUPに学ぶ」に参加した。

友の会（大花）

1. 友の会には現在76名の会員が登録されている。
2. 10月上旬に和文機関誌「化石」を発送した。
3. 琵琶湖例会のプログラムを会員に発送予定である。

会員の入退会報告（前田；間嶋代理）

前回の評議員会（2009年6月25日）以降、入会14名（三宅由樹君、倉谷うらら君、磯和幸延君、福田泰成君、新谷友彦君、唐沢與希君、野下浩司君、橋口昭彦君、李 瑞清君、小林与人君、佐藤 圭君、小野寺悟君、伊津野郡平君、時田徹君）、退会6名（解良康治君、横尾浩一君、木戸絵里香君、江藤哲人君、猪間明俊君、本田信幸君）があった。市川浩一郎君の1名が逝去した。

一方、特別会員の坂上澄夫君が名誉会員に推戴された。

また、会員資格変更に関しては、前回評議員会で特別会員に推挙された普通会员のうち、森野善広君、永戸秀雄君、守屋和佳君、渡部真人君、栗原敏之君、柏山祐一郎君、岩下智洋君、鶴飼宏明君、山口龍彦君、狩野泰則君、小林快次君、辻野泰之君、姉崎智子君、木元克典君の14名が特別会員への資格変更を受諾した。2010年1月28日現在、会員数は1,068名（前回評議員会比+13名）である。

編集状況報告

欧文誌（大路）

1. 13巻は4号まで発行済みで、年間総ページ386ページでOriginal Article 32編、Short Note 1編が掲載されている。14巻1号は投稿論文6～7編程度を掲載予定である。
2. 今年度の投稿数は2008年度より若干減少した。今後予定されるImpact factorの発表の影響を考慮しながら、投稿を促す必要がある。

化石（生形）

1. 87号は6編の論説、1編の解説原稿を掲載予定である。88号は75周年特集号で、75周年に関連した解説や記事を掲載予定である。
2. 「化石」の編集委員会の構成を変更した。委員長は生形貴男君、幹事は鈴木雄太郎君、編集委員は江崎洋一君、奈良正和君、西弘嗣君、佐藤慎一君、佐藤たまき君、矢島道子君である。
3. 「化石」の印刷所を沼津市のみどり美術印刷株式会社に変更した。
4. 「化石」投稿カードの記載事項である、原稿の返却についての部分を削除する改訂をした。

特別号（遠藤；代理加瀬）

特になし。

連合・学術会議報告

地球惑星科学連合（加瀬）

1. 学術会議の活動について、科学技術基本計画への提言として「日本の展望」をまとめており、現在素案が完成し、推敲、校閲している。科学者委員会の大型研究計画部会において、第四期科学技術基本計画に反映させる大型研究計画リストを作成している。
2. 「博物館法見直しの勧告に対する反対声明」を内閣府と地方分権改革推進委員会に提出した。
3. 2012年に国際地学オリンピックを日本で開催することになった。
4. 連合のジャーナルを発行する方針が出された。全分野のe-Review誌、セクションごとのe-Letter誌の2つの電子ジャーナルを検討している。
5. 地球生命科学セクションの組織が決まり、セクションプレジデントに北里洋君、執行部と代議員の半数以上が本会会員となった。セクションにおける連合大会のセッション提案、国際組織（EGU, AGU, AOGS）との連携の活動を行っている。

学術会議（北里・真鍋）

1. 「日本の展望」について、4月の総会で承認されると公表されることとなる。
2. 第二部の統合生物学委員会自然史・古生物分科会では、博物館法の見直し勧告について、検討している。
3. 第三部の地球惑星科学委員会では、大型研究計画、地学教育について検討中である。

自然史学会連合（甲能）

1. 2009年11月7～8日に連合講演会「未来に残したい日本海域の自然史遺産」を石川県立自然史資料館で開催した。本会から北村晃寿君が大桑層の化石から探る気候変動について講演した。来年度の講演会は2010年11月27～28日に岩手県立博物館で開催を予定している。
2. 京大生態学研究センター、霊長類研究所の共同利用・共同研究拠点の認定に関して、連合として要望書を提出していたが、生態学・生物多様性科学の先端的共同利用・共同研究拠点の認定を受けたと報告があった。

3. 地方分権改革推進委員会第3次勧告の博物館法見直しに対する反対声明を関係所轄に提出した。
4. 藤原ナチュラリスト振興財団第1回シンポジウム、生物多様性JAPAN生物多様性国際シンポジウム、日本生態学会第13回公開講演会に対する後援を行った。
5. 2009年12月19日に科博分館において総会が開催され、2008年度会計決算、2009年度予算の中間決算、2010年度事業計画・予算案が報告され、承認された。代表選が行われ、西田治文代表が引き続き選出された。

日本分類学会連合（佐々木；代理加瀬）

1. 電子出版に関する動物命名法国際審議会から国際動物命名規約「修正案」が出された。この修正案について検討したところ、この修正案は問題ないと判断した。
2. 連合の代表と役員の2010～2011年度役員の選出が行われた。本会からは2010年度広報出版委員会委員長に佐々木猛智君が選出された。

各種委員会報告

将来計画委員会（75周年記念事業実行委員会；加瀬）

1. 第2回常務委員会で、第1回将来計画委員会（75周年実行委員会）を9月12日に開催することになっていたが、諸般の都合で延期した。
2. 招聘予定の中国古生物学会会長・Yang Qun教授、韓国古生物学会会長・Jong Deock Lee教授から回答を得た。
3. Tシャツ企画の進捗について、「化石」へ宣伝ページを挿入したこと、各種公募情報に宣伝を依頼したこと、および審査委員として加瀬会長、小田隆、小笠原、真鍋、西の各氏に依頼したことが報告された。
4. 名簿発行について、データシートを会員ごとに印刷・配布する方式で個人データの最終確認を行う予定である。
5. 75周年実行委員会のメンバーに前田会員係を追加したことが報告された。
6. 以下の式次第案を次回常務委員会に諮ることとした。常務委員会通過後、次回評議員会に付議することになる。2009年6月10日（水）の13:00より、前会長講演（小笠原前会長）（40分間）、中国古生物学会会長の講演（20分間）、韓国古生物学会会長の講演（20分間）、Briggs教授による招待講演（60分間）の順で、記念講演を行う。英語→日本語の同時通訳は行わない。その後15:30より、記念式典を執り行う。式典では、海外からの招待者に対して、英会話に堪能な会員が日本語の内容を英語で要約する方向で準備する。式典での特別講演は行わない。
7. 75周年記念シンポジウム“The Mesozoic Revolution: a global biological transformation”の粗案について審議し、日本の講演者について若干名の追加を検討し、コンビナーを大路君と天野君が担当する方向で修正案を作成することとなった。
8. 記念グッズについて、常務委員会・評議員会に諮る以下の原案を了承した。
 - Tシャツデザイン採用者への賞金及び商品について
デザイン採用者への賞金を各部門5万円とする。
 - Tシャツの制作枚数および販売価格について
Tシャツの制作枚数は3部門で各50枚ずつ合計150枚とする。販売価格は1枚2,000円。
 - エコバッグを制作し、参加者に配布する。
 - ニッポニテス携帯ストラップを入れるケースを発注する。
 - ストラップ制作者に対して謝礼を出す。
9. 予算案の大枠について検討した。一部を修正した原案を常務委員会・評議員会に諮る。
10. 記念講演・式典の役割分担を確認した。全体：加瀬会長、

近藤行事, 小笠原 (会場校), 間嶋庶務. 記念講演: 近藤.
記念式典: 間嶋, 近藤.

11. 古生物学事典の編集状況 (2010年1月26日時点) は以下の通りである.

- 2010年1月22日 再校校正の出校 (当初予定より7日遅れ). 項目のみで, 五十音順に配列, 530ページ. 現在, 北村、真鍋両編集幹事ならびに朝倉書店担当者が再校校正の確認作業を行っており, 2月中旬までに校正が終わる予定.
- 巻末付録と図の作成は終了し, 佐藤会計係から, 作成者に以下の経費が支払われた.

古生物学事典の巻末付録の作成費用 41,000円.

古生物学事典の図の作成費用 36,000円.

注記. 再校校正で最も注意する点は第四紀・第三紀の境界年代の変更に伴う修正.

PR仕様策定委員会 (間嶋)

1. PRの科研出版助成に向けて, 印刷会社3社に見積の依頼を送付した. この際, 印刷金額が250万円を切る場合は競争入札を行わず, 見積もり金額その他を勘案して印刷会社を決定する旨の内容を書き記した.
2. PRの科研費出版助成に向けて, 印刷会社3社より見積もり金額を得た. 意見交換の結果, 印刷会社の選定が常務委員会及び評議員会の審議事項であることを確認した.

審議事項

会員名簿の発行について

75周年事業として行われる会員名簿の発行について, 現段階までの進捗状況 (会員データシートを各会員に個別に琵琶湖例会のプログラム発送に同封したこと) および今後の予定 (会員からの返送の締め切りを2月末とすること, その後データ整理を進め業者に見積もりをとること, 平成22年度総会後に印刷を発注すること, 化石88号刊行にあわせて名簿を全会員に郵送すること) を承認した.

第160回例会開催地の決定

第160回例会を高知大学で2011年1月28日 (金) ~ 30日 (日) に開催することとした.

ポスター賞選考委員の選出

第159回例会のポスター賞の選考委員に, 天野和孝君 (委員長), 北里 洋君, 小笠原憲四郎君, 佐藤たまき君, 矢島道子君を選出した.

75周年記念事業計画案について

75周年記念年会プログラム (75周年記念式典, 75周年記念シンポジウム) および予算案 (招聘関係経費, 会場費, 記念グッズ, 名簿作成費) を承認した. 本事業に係る経費 (約500万円) は学会基金より支出する. 事業の概要は以下の通りである.

1. 6月10日 (木) 13:00より, つくば国際会議場において会長講演 (小笠原前会長), 中国古生物学会長講演, 韓国古生物学会長講演, 招待講演 (Briggs教授) を行い, 15:50より記念式典を行う.
2. 6月11日 (金) 10:00より, 記念シンポジウムを行う. シンポジウム案「The Mesozoic Revolution: a global biological transformation」(世話人: 大路樹生・天野和孝) を承認した. 内容の詳細については世話人と常務委員会等で検討を進める.
3. 6月12日 (土) ~ 13日 (日) は筑波大学において, 一般講演 (口頭発表, ポスター発表) を行う. 総会および懇親会については6月12日 (土) の16:00より行う.
4. Tシャツデザイン募集を広く宣伝するために, デザイン系の大学と専門学校へポスターを作成して送付することと

なった. ポスター作成費は5,000円.

PR印刷会社の決定について

3社の印刷会社の見積もりと技術を検討し, 平成22年度のPRの印刷をテラパブに発注することを決定した.

化石投稿規程の改定について

以下の化石投稿規定改訂原案を承認した.

2. 投稿手続きと審査
 - a. 投稿原稿 (図・表を含む) は, 電子ファイルまたは紙媒体のいずれかで提出する. 電子投稿の場合は, 電子メールの添付書類として下記送付先に投稿カードとともに送信するか, ファイルが大きい場合には記録媒体に焼いて郵送する. 紙媒体で投稿する場合は, コピー (論説と総説は3部, これら以外1部) のみを提出する. ただし, コピーでは不鮮明となり審査に支障が生じることが予想される写真原稿の場合には, オリジナルの写真も提出する. 紙投稿の場合, カラー印刷を希望する原稿は, カラーコピーを提出すること. 郵送の場合には, 封筒表に「原稿在中」と明記し書留とすること.
 - c. 原稿の送付先
〒422-8529
静岡県駿河区大谷836
静岡大学理学部地球科学科内
日本古生物学会「化石」編集委員長 生形貴男
sbtubuk@ipc.shizuoka.ac.jp

IPC (イギリス) 参加の定職のない若手研究者へ旅費の補助について

ロンドンで開催される第3回 International Palaeontological Congress (IPC3) に参加する本会会員の大学院生および職を持たない Post Doc. (ただし科研費等の助成金や所属機関からの旅費の支給の受ける見込みのないもの) に対し, 上限20万円の助成を, 10名以内で行うこととした. 助成を受けた者には, その内容を2011年年会で講演することを義務付ける. 講演要旨を審査対象とし, メーリングリストやHP上で会員に対して早急に周知する.

学会賞 (横山賞) 授賞者について

北里 洋君と棚部一成君に, 学会賞 (横山賞) を授与することを決定した.

感謝状について

75周年記念式典において, 財団法人藤原ナチュラリストリー振興財団に感謝状を贈呈することとした.

授賞ポスター

日本古生物学会第159回例会 (1月琵琶湖博物館) 優秀ポスター賞

對比地孝亘・藤山佳人・渡部真人・Rinchen Barsbold・Khishigjav Tsogtbaatar 君
獣脚類恐竜 *Tarbosaurus bataar* の脳函形態, 特に脳エンドキャストと後頭部の筋肉付着部位に関する新発見

木村由莉君

内モンゴル産トビネズミ化石から示唆される Sicistinae 亜科の大陸間移動とその意義

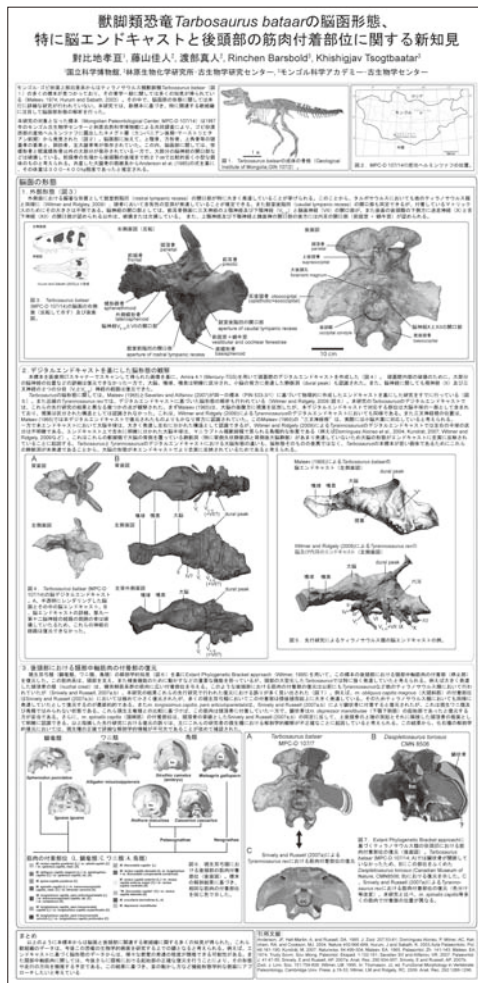
早川達也・平野弘道君

北海道北西部上部白亜系における炭素同位体比層序とイノセラムス化石帯の対応関係

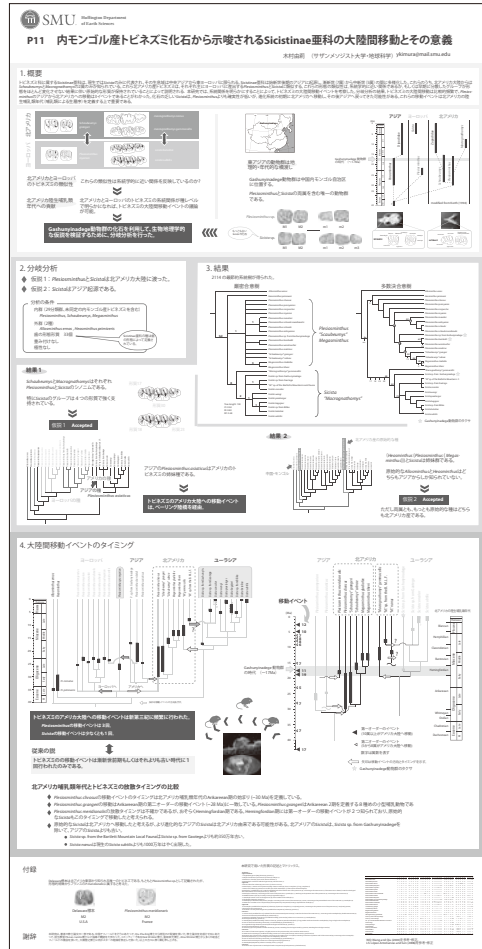


ポスター受賞者

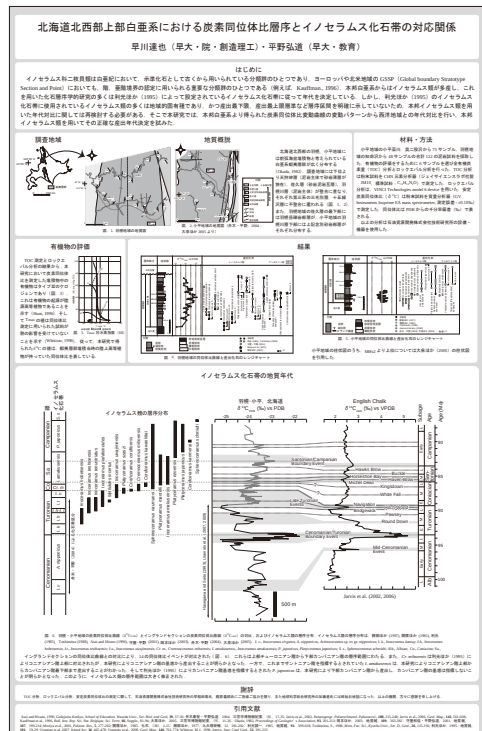
左から對比地孝亘君, 加瀬友喜会長, 木村由莉君, 早川達也君



對比地孝亘君ほかポスター



木村由莉君ポスター



早川達也君・平野弘道君ポスター

編集委員会より

このたび編集長を拝命いたしました静岡大学の生形でございます。西前編集長より引き継いだ良き伝統を守るとともに、より魅力的な雑誌にしてくために微力を尽くす所存ですので、どうか宜しく願いたします。本号では特集は組まれませんが、一般投稿の論説6件と解説1件を掲載することができました。投稿して下さる会員の皆様とともにこれからの「化石」を作ってゆきたいと思いますので、皆様奮ってご投稿下さいようお願い申し上げます。

(生形貴男)

今年度より編集委員になりました静岡大学の鈴木雄太郎です。研究においてはマニアックすぎるとのお言葉を頂戴することが多いのですが、編集作業においては、マニアックの良さを排除せずに、わかりやすさ、みやすさを念頭に貢献できればと考えております。

(鈴木雄太郎)

本号から編集委員を仰せつかりました。本誌が、今まで同様、あるいは、それ以上に魅力ある邦文誌として古生物学の発展に寄与していける様、努力して参ります。よろしくお願い致します。

(奈良正和)

この度、新しく編集委員として加わることとなりました。これまでの他学会での編集委員の経験などを生かして、「化石」をより良い雑誌にするために微力を尽くします。どうぞよろしくお願い致します。

(佐藤慎一)

「温故知新」、故きを温ねて、新しきを知るような論文や記事を積極的に見だし、『化石』に掲載していきたいと思います。宜しくお願いします。

(江崎洋一)

